

憂き身には絶えぬ嘆きに面おもなれてものや思ふと問ふ人もなし

鴨長明

『新後撰和歌集』「恋」の一首。

「ものや思ふと問ふ人」とくれば、あれだな、と気づく
わかりやすい本歌取りの歌。

しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人の問
ふまで 平兼盛『拾遺和歌集』

(耐えて隠していても、恋の苦しさは面おもに出てしまう)
ものなのだなあ。もしや恋?と人に問われてしまう)

村上天皇の内裏歌合の名勝負として語り伝えられる歌である。勝負の相手は三十六歌仙の一人・壬生忠見。「恋すてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか」(恋しているという私の噂はもう評判になってしまった。人知れず深く秘めて、思いはじめた恋だというのに)。判者の藤原実頼が判に迷うとき、村上天皇が「しのぶれど」と呟いたために兼盛の勝ちとなったという。今ならば、

「付度」や「パワハラ」などのワードが飛び交いそうな話。忠見は悔しさのあまり拒食症になって死んでしまったという後日談まで伝わっている(ホントかいな)。

それはともかく、この内裏歌合の評判の名歌を、いくらかの自己卑下といくらかのアイロニーを込めて詠んだ冒頭の一首には、題詠とはいえ、いかにも鴨長明らしい屈折した気分が満ちていて、おもしろい。

「辛いことばかりの私は嘆きが絶えないせいか、ふさぎ込む面持ちにみんな慣れてしまつて、恋に悩むときでさえ、もしや恋?と問う人もない」という。

じつはこの歌、出典の『鴨長明集』には、「憂き身には絶えぬ思ひに面おもなれてものや思ふと問ふ人もなし」となっている。『新後撰集』入集の際の改作は撰者によるものだろうか。「思ふ」の重複はあるにしても、原作のほうがよかったような気もしなくはない。

『鴨長明集』は長明二十七歳ごろの家集だから、案外若いときの歌である。が、『方丈記』や『無名抄』の著者としての面影がすでに彷彿としている。(小島ゆかり)

